

◇巡検の記録◇

米 沢 巡 検 （ 内 藤 先 生 ）

2 月 2 7 日 ～ 3 月 1 日

東京では、そろそろ春の訪れが感じられる頃、雪の東北での巡検を行なった。

27日 14:00, 米沢駅改札口集合。織物会館にて、米沢における織物業の概観を聞き、18世紀頃に織物産地としての形態を整えた事、工場は規模の零細なものが多い事などを知る。その後、婦人洋服地を製造している湯野川工業有限会社にて工場見学。織機を扱うのは全て女子。又、凶案・刺繍・先染め・後染めは外注に頼っている。製品は、買継商・卸商を通して小売店へ、という古くからの流通経路が根強く保たれている。

28日 宿舎から徒歩で、えぼし山公園へ向い、見晴らし台より赤湯の町を望む。9時過ぎ、南陽市役所にて、温泉・ブドウ栽培・白竜湖についての概観を聞き、その後で実際に現地を訪れた。

白竜湖は、面積約9haの湖沼で、周辺一帯は、泥炭と粘土の互層から成っており、そこでは、近年数は減ってきたが、高山植物の生育も見られる。泥炭のまま水田化しても、一般の田と同等の生産はあげられないので、昭和37年から、泥炭地のほとんどを、乾田化及び区画整理する土地改良工事が続けられており、完成もま近い。その為に、数年前まで行なわれていた、やち船、下駄を使い農作業は、もはや見る事はできない。ハンドボーラーを、ハンマーを用いずに1.5mの深さまで刺し込める程の泥炭層の軟らかさには、驚いてしまった。

午後からは、ブドウ園経営者宅と、赤湯の温泉事務所を訪れた。赤湯付近のブドウ栽培地は、白竜湖の泥炭の延長上にあるが、当地域では、柑橘類以外ならば何でも生育すると言う。生産高では、県内の約10%を占めるに過ぎないが、品質の良さは有名であり、換金作物とただけでも、60年以上の歴史を持つ。温泉業とブドウ栽培の両方を行なう者は多くない。

赤湯温泉で注目すべきは、昭和27年から旧源泉の1つに水を注入して湯量の増加を計っている事である。水質・水温とも変わる事なく、この試みが成功した理由は、断層から逃げる湯を、水が遮ってしまうからである、という説明であった。しかし、地質・地下水面の傾斜が明らかではないので、上記の内容が正しいかどうか疑問である。

1日 国鉄長井線の終着、荒砥へ向う。荒砥を中心とする白鷹町は、江戸時代には、最上川の船

場として栄えていたが、現在では第2・3次産業への就業機会が少なく、都市機能も未整備な為に、人口流出が著しい。この状況を『田園都市計画』によってくい止めようとしているが、前途は楽観視できない。

町役場を訪れた後、栃窪地区集団移転先にバスで向う。移転によって、男子若年層と女子の就業機会は増えたが、男子の中には、夏の山作業、冬の出稼ぎと、従来の形態を続けている者も少なくない。移転跡地には、『ふるさと村構想』に沿って、自然研修センター・観光産業地帯の形成が進められている。

午後には、再び長井市へ。第2次大戦中、町ぐるみの企業誘致で成立した、マルコン電子KKを訪れた。栗子峠トンネル開通によって、東京の1日経済圏にくみ入れられた事は大きい。その後、長井紬の工場を見学する。長井紬は、200年の歴史を持つが、最盛期は大正時代で、現在の企業数は約20。ここでも、買継商を通して、各地に製品を送り出すシステムである。

今回の巡検は、予定も順調にこなせたが、いつか今度は、季節を変えて、ブドウ栽培作業を見たり、白鷹町栃窪へ行きたいと思う。又、時節柄、寒い3日間ではあったが、私たちの巡検に協力して下さった方々の、暖かい御気持には、深く感謝する次第である。

(4年 黒澤章子)

会津巡検（正井先生）

3月6～8日

関東平野北東部の平野はからっ風を受けて黄土色に枯れていた。抜けて会津の山中に入るとそこは白い雪をかぶって、柔らかなたたずまいを見せていた。雪の落ち着いた様は人の心をほっとさせる優しさを持っている。粉をふきそうなほどにバサバサに乾いた空気の中を通して来たあとの雪景色の静かさは殊更だった。おまけに晴れた日だった。雪の優しさは晴れた日に増す。それは女の人の化粧にも似ていた。

雪を見るために出かけた巡検である。会津若松の雪は街にみずみずしさと潤いと若やいだ活気を与えていたし、会津坂下の雪は取残された田舎町の寂しさを空々しい明るさで満たしていたし、喜多方の雪は新興住宅地の添え物としての雪だった。

猪苗代の雪は凄かったと思う。猪苗代駅から南の方、猪苗代湖の方に向かっては、恐らく見渡す